

フォト・エッセイ●ミャンマー

# シャン高原のタンデー村

写真と文 高橋昭雄

●Akio Takahashi



5日に1度開かれる村の市。シャン人のほか、パオ、ダヌ、インダー、ミャンマー、カチン、中国など近隣に居住する様々な民族が集まつてくる。

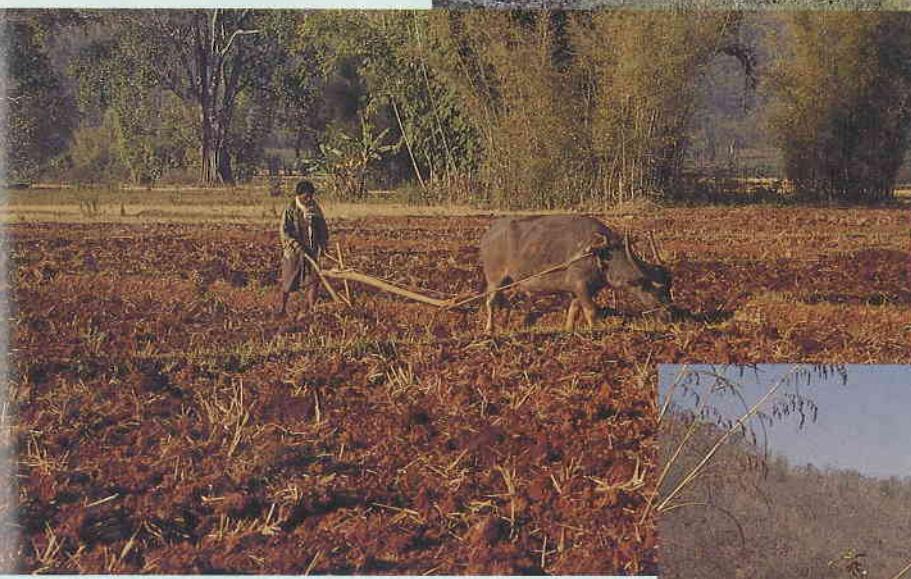
シャン高原の山々の間に深く刻まれた谷の中に、シャン州タウンジー県タンデー村はある。標高は約1000メートル、冬には氷が張るほど寒くなる。この村は一九九一年までパオ民族機構（PNO）の支配下にあり、ミャンマー中央政府も迂闊には足を踏み入れることができなかつた。停戦協定の前までは、村民はPNOに少額の税金を払い、中央政府の重税や農産物の徴発を免れていたという。私のような外国人が村に滞在するのはもちろん初めてのことである。

村の民族別人口統計によると、シャン人が最も多く、続いでダヌ、パオ、の順となつてゐる。そしてわずかながら、「ミャンマー人」も住んでいる。ここで「ミャンマー人」とはもちろんビルマ民族をさす。しかし一九八九年の「Burma」から「Myanmar」への国名の英語名称変更時に、「バマーバurma」はビルマ「民族」の呼称、「ミャンマー」は国内に住むすべての民族を包摂する「国民」の呼称、と決められたはずである。もつとも、「ミャンマー」は文語で、「バマーバurma」は口語であるという違ひのみで、その意味するところは本来「ミャンマー（バマーバurma）」という「民族」にすぎない。歴史的経緯を無視した新概念の導入は、まだ少数民族には受け入れ難いようである。

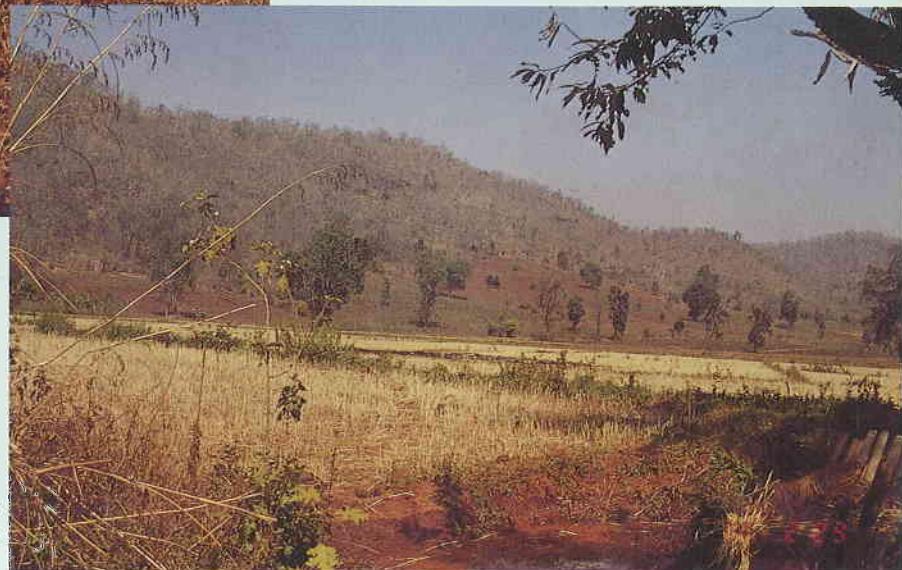
タンデー村の耕地は、山々の麓から湧き出てくる三つの泉によつて潤いを与えられ



木々がうっそうと生い茂った湧水の森。



畑を耕起する水牛と人。



手前は灌漑水路と収穫後の小麦畠。遠方に見えるのは山畠と緑を失った山肌。

耕地の形態は、山の急斜面に切り開かれた山畠、耕地面積の大部分を占める灌漑付きの畠、そして灌漑水路下流部の低地に広がる水田の三つに分けることができる。山畠では、五月から一二月にかけての雨期に、キマメ、ニゲル、ヒナワリなどが混作される。灌漑畠では、雨期には村の最重要作物である小麦が作付けされ、乾期の収穫後すぐに、落花生や大豆が播種される。ミヤンマー中央平原の畠作地帯でも二毛作は行われるが、大量の化学肥料が使用されている。だが、タンデー村では湧水灌漑が肥沃な山の養分を運んできてくれるので、厩肥以外の肥料は一切使われない。水田では雨期に水稻が作られるだけである。シャン米と呼ばれるこの米は、「ミャンマー人好みのアミラーゼの多いぱさぱさ米ではなく、同じインディカでも粘り気が強い。ヤンゴンに住む日本人の主食は皆これであ

る。水田や畠の耕起は畜力によつて行われ



小麦の収穫風景。一般に小麦の刈取りは女が行い、脱穀作業を男がする。



庭先で納豆を干す農家の女。つぶして干した納豆は村の市で売られる。



屋敷内を散歩するチョーザー氏。後方は彼の家。筆者はここに泊めてもらった。

1988

田植えはミャンマー人の村同様、女の仕事である。けれどもタンデーの女は田植えができない。早乙女は何十キロも離れたところからやってくるインダーラ人の女たちである。また稻刈りのときにも遠くの村から農業労働者がやってくる。それでは村に農業労働者はいないのだろうか。否、この村にも平原部と同様に多くの土地なし世帯が居住しており、他に雇用機会がないので農業賃労働に従事している。だが、彼ら彼らが主に従事するのは畑仕事である。耕起から始まって、播種、草取り、収穫、運搬と、多毛作の畑仕事には切れ目がない。

湧水灌漑のおかげで、この村の農民も農業労働者も、中央平原部の村よりも豊かな印象を受ける。それでも農業生産や消費生活に質的な差があるというわけではない。ところが、一人ここにとてつもない大農民がいる。チョーザー氏がその人である。彼は三〇〇エーカー（約一二〇ヘクタール）の農地を持ち（全国平均は五・五エー



市場で自家製の卵とこんにゃくと漬物を売る村の女性。

チヨーザー氏の広大な農地を耕す、マッセーファーガソン社製のトラクタ。耕起した後にはサトウキビが植えられる。



村営賭博場で深夜まで遊ぶ村の男たち。  
収益金は村の道普請に使われるという。

チヨーザー氏の例は特別としても、接收や重税に象徴される社会主義中央政権の統治が完全には及ばなかつたことが、シャンの山奥のタンデー村に相対的な繁栄をもたらした一因であることは疑いない。では新たに登場した軍事政権とPNOとの停戦協定はさらなる繁栄をもたらすのか。今後もこの村の行方を見続けていきたい。

(たかはし あきお／東京大学東洋文化研究所助教授)

カー）、これを六台のトラクタ、四台の耕耘機、七〇頭の牛および水牛、そして三〇〇人の労働者で経営している。しかも、何でも国有化してしまった社会主義時代からずっとこのような経営をしてきたというのだから驚きである。一九四八年のミャンマー独立以前、シャンには藩侯国という半独立国が林立していたが、彼の家は代々この藩侯（ソーボワ）に仕え、タンデー村を含む広い地域の領主であった。五九年に彼はヤンゴンで農機具の会社を起こし、その関係で日本にも六ヶ月ほど滞在している。しかし、六年の社会主義「革命」で会社の土地、建物、数百台の耕耘機等はすべて接収され、彼は村に引き揚げることを余儀なくされた。にもかかわらず、チヨーザー氏はにつくさ社会主義計画党に入党して地方の幹部になるとともに、PNOとも誼を通じて、大経営を守り続けてきたのである。辺境の村であつたからこそ可能だつた計略であろう。

チヨーザー氏の例は特別としても、接收や重税に象徴される社会主義中央政権の統治が完全には及ばなかつたことが、シャンの山奥のタンデー村に相対的な繁栄をもたらした一因であることは疑いない。では新たに登場した軍事政権とPNOとの停戦協定はさらなる繁栄をもたらすのか。今後もこの村の行方を見続けていきたい。